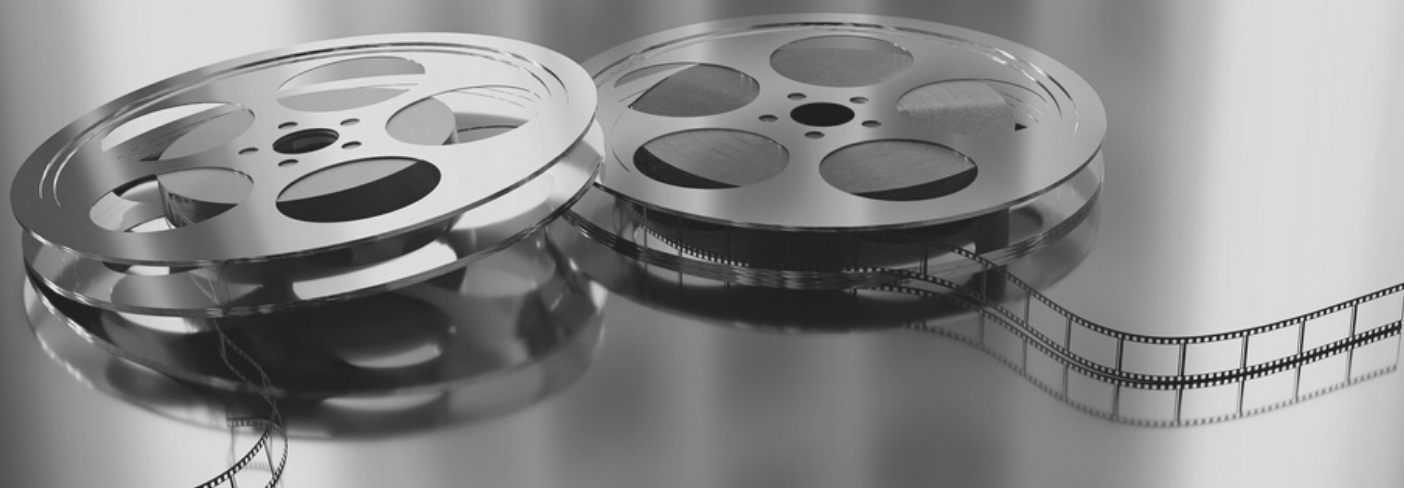


シネマ通信

第7号 (2023年1月30日)



イニシェリン島の精霊

第7回鑑賞作品

監督：マーティン・マクドナー
脚本：マーティン・マクドナー
出演：パードリック (コリン・ファレル)
 コルム (ブレンダン・グリーンソン)

アイルランドの孤島に
住むパードリックは
ある日、親友から
突然、絶交される

フィッシャーマンズ・セーターで有名なアラン諸島の架空の島に住む中年男：パードリックは、長年の親友コルムから突然、「もう二度と会わない」と宣告される。のんびりほのぼのとした島民の日常。村の少年からは「あんたたち絶交！なんて、いい年こいて12歳みたいだな」と、からかわれたりする。しかし、牧歌的な風景はそのままに、人間関係は次第に恐ろしいことになっていく。

予測不能な展開にぐんぐん引き込まれる観客たち。ヴェネツィア国際映画祭と同様、ゴールデングローブ賞でも主演男優賞、脚本賞、作品賞（ミュージカル・コメディ部門）を受賞。本年度アカデミー賞の最有力候補といわれています。



About Them

「イニシェリン島の精霊」に筆者が興味を持ったのはまず、その題名。未知の地名に、妖しさ、寂しさ、そして限りない旅情を感じました。監督がマーティン・マクドナーとなれば、見ないわけにはいきません。彼は、近年ハリウッドの最高傑作の一つ「スリー・ビルボード」の監督です。「スリー・ビルボード」は娘を痴漢に殺された母親が異常なまでの執念で犯人を捜し出す物語。といってもサスペンスでもアクション映画でもありません。米、ミズーリ州の田舎町に住む普通の人々の生き様を、見事に描き出した映画です。

M・マクドナーは、1970年、アイルランド人の両親のもとロンドンで生まれました。高等教育は受けておらず、26歳で劇作家として認められるまでは、非正規雇用で働いたり失業手当を受けたりしていました。本作も戯曲として書かれましたが、舞台上で上演される前に映画となりました。

本土が内戦に揺れる1923年。アイルランドの孤島で展開される悲喜劇。一度見ただけでは気づきにくい伏線が幾重にも隠されているとか……。

鑑賞後のトークも楽しくなりそうな作品です。



About Something

インド映画「エンドロールのつづき」を見ました。原題は「LAST FILM SHOW」。「私は、自分以上の映画ファンに出逢ったことがない」と豪語するパン・ナリン監督の半自伝的映画です。

空と畑以外何もない田舎の鉄道駅で、父を手伝いチャイ売りに励む少年：サマイ。9歳で初めて映画を見たサマイは光の世界にすっかり夢中になり、翌日、学校を抜け出して映画館に行く。もちろん、チケット代のないサマイは追い出されるが、それを見た映写技師のファザルは、ある取引を持ちかける。サマイの母の手づくり弁当と引き換えに、映写室からタダで映画を見させてくれるというのだ……。

映写室育ちの少年が、後に映画監督になるという展開から「ニュー・シネマ・パラダイス」のインド版とも評されますが、この映画は決して亜流ではありません。落ちぶれながらもバラモン階級であることに誇りをもつ父、すべてを受け入れて家族を優しく包む母、何もないからこそ生まれる少年たちのエネルギーで愉しげな日々、フィルムがデジタルに取って代わられる時代描写など、全く独自の映像世界に観客を引きつけて放しません。少年を主人公とするインドのヒット映画といえば「スラムドッグ\$ミリオネア」や「LION 25年目のたがいま」が思い浮かびますが、登場するのはすべて貧しい少年。思えば「オリバー・ツイスト」も「レ・ミゼラブル」も、社会の底辺であえぐ少年たちの物語。洋の東西を問わず、リッチで幸せな少年は、あまり作家たちの創作意欲をそそらないようです。

少し不謹慎な発言かもしれませんが、実は、私は「ナチもの」が大好きです。それは、あの狂った時代をテーマとした文学や映画には、人間の本质に迫る名作がたくさんあるからです。負のヴォルテージが高ければ高いほど、それが芸術作品に昇華されたとき、そこには、人々の魂を揺さぶる圧倒的なパワーが宿るのではないのでしょうか？

極悪が極上を生むというのも、世の皮肉の一つかもしれませんね。